

大乘

DAIJO 法話

後ろ姿に導かれて



千葉・天真寺衆徒
にしはら たつや
西原 龍哉

わが家には、オスのチワワ犬がいます。名前はマルといいます。マルの得意芸は合掌のポーズで、後ろ足で立って小さい前足を合わせます。子犬の時、おやつたびに教えていたら、おやつ欲しさにすぐに覚えてしまいました。今ではお腹が空くと、おやつをねだって自ら合掌のポーズを見せます。犬なので当然ですが、マルは合掌をしても、その意味はわかっていません。ただおやつが欲しいという欲望だけで、教えら

れた芸を繰り返しているに過ぎません。そして、おやつを食べるとお礼も言わず、フイとどこかへ行ってしまう。その様子を見て、では人間である私はどうなのだろうと思いました。自分の欲望に振り回されて感謝のない生活をしているのは、この私も同じではないかと考えさせられたのです。

あるお寺の掲示板に、「同じ手でも握ればゲッコツとなり、胸に手を合わせれば合掌とな

る」という法語がありました。自分の手が、相手を攻撃する凶器にも、相手を敬う合掌にもなるとは、その通りです。その法語に自分の生き方を問いかけられたような気がして、深く心に残っています。

私のお寺は、都市開教寺院です。祖父である前住職は島根県のお寺の次男で、昭和三十二年（一九五七）に島根の寺を離れ、単身で東京に出てきました。当時は車で丸一日の距離です。上京すると、まずは築地本願寺にある夜学の東京仏教学院に通い、法務の手伝いなどで何とか生計を立てました。翌年には妻子を東京に呼び寄せましたが、家族四人の住まいは台所・風呂・トイレが共同の六畳一間という生活です。時には托鉢たくはつに立つこともあり、水をかけられるようなつらい経験もしたといっています。

昭和三十八年、都営霊園が近くにあるという理由で千葉県松戸市の一軒家に移り、布教活動を本格化させました。と言っても縁もゆかりもない土地で、まさにゼロからのスタートです。

当初はお花や書道の教室を開いたり、新聞の折り込みでお寺の入会案内を配ったりしても、なかなか縁は増えません。毎日、近くの都営霊園に通い、石材屋さんで法事をする方を待つ一つ一つ縁を作っていました。ですから、法話をしてもお参りはたったお一人、そんなことが何度もあったといえます。しかしそのうち、そのお一人がご家族を誘って三人になり、霊園でご縁ができた方、近所の方と一人ずつ増え、少しずつお参りの方が増えていきました。

そして昭和四十六年、宗教学人として認可され、新しいお寺「天真寺」が誕生しました。そ

の頃には、本堂のある二階の床が抜けそうだと心配されるくらいお参りの方が増え、ご門徒さんから広い本堂を作ろうという声が上がリ、平成元年に現在の地へと寺基を移転しました。その時の法要の様子は、NHK特集「寺が消える」で放送され、大きな反響がありました。番組では、山陰地方の過疎化により護持が難しくなっていたくつものお寺の現実が映し出されています。都市開教の背景には、故郷を思いながらも都会に出て来ざるを得なかった切実な現状があったのです。

大変な苦勞をしても、お念仏のみ教えを広めたいという情熱を持ち続けた祖父のパワーには頭が下がります。しかし、人には言えないつらい経験をしたせいか、孫である私に苦勞話をすることはほとんどありませんでした。ですから、

小さい頃から私にとってお寺はあって当たり前で、お参りをするように言われても嫌々手を合わせる有り様でした。口では何も言わない祖父でしたが、そんな私を見越してか、お仏壇に十円玉を置くのです。私はそつとお仏壇をのぞいては、お小遣い欲しさに手を合わせていました。その十円玉には、いつか手を合わせる本当の意味を知ってほしいという祖父の願いが込められていたのだらうと思います。

私が自分から手を合わせるようになったのはいつからだろうと思ひ返してみると、都市開教で苦勞をした祖父、お寺でお参りされるご門徒さん、私を導いてくださった恩師など、多くの方々の後ろ姿が心に浮かびました。それは、仏さまに手を合わせお念仏をよろこんでいる後ろ姿です。今、この私の合わさるはずがない手が



カット 長井多美栄

合わさり、私の口から出るはずのないお念仏が出るようになるまでには、さまざまなお育てをいただいていたことに気がつきました。

自分の欲望に振り回されて感謝のない生活をしている私に、阿弥陀如来は「必ず救う、我にまかせよ」とよび続けてくださっていました。阿弥陀如来の救いの目当てがこの私であったと聞かせていただいた時、自分の手が自然に合わさったことを覚えています。そして、私をお育てくださった方々も、こんなふうにお念仏をよろこんでいたのだらうと思ひ至りました。

今年も桜の開花が待たれる彼岸の時期が近づいてきました。その後ろ姿を通して私の人生にとって最も大事なものを伝えてくださった方々をなつかしく思い出しながら、まわりの方々とともにお念仏をよろこびたいと思います。